

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第123号(通巻第183号)
2014年4月24日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43td@train.ocn.ne.jp
URL http://ecometingtama.blog.ocn.ne.jp

水辺の楽校の“始業式兼総会”開催



流研究所の中村所長が挨拶

多摩市水辺の楽校の今年度の始業式ともいえる「楽校式」が4月19日、市立グリーンライブセンターで行われた。ここに源は国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所の八木昭稔河川環境課長や多摩第一小学校の木下和紀副校長、連光寺小学校の阿閉暢子校長先生らが出席。

また、多摩川源流体験キャンプで多摩の子どもたちが毎年お世話になる多摩川源流研究所(山梨県小菅村)からは中村文明所長がご夫妻で参加してくれた。

このほかにも、市環境政策課の鈴木隆史課長や同運営協議会の西厚会長、水辺の楽校のボランティアスタッフらが出席。20人ほどの賑々しい顔ぶれがそろった。

式の挨拶で中村氏は「源流研究所ができてから2~3年後に多摩の子どもたちがやってくるようになった。子どもを中心としてキャンプの運営委員の人、学校、行政との協力関係が非常にうまくいっている。今後とも期待している」とエールを送った。

また、国交省の八木課長は近年、多発している局地的な集中豪雨の被害低減に向けた最新のXバンドMPレーダー(1分間隔で観測、250mメッシュ、有効観測範囲60km、観測から配信まで1~2分)というレーダーで観測していることや、「子どもたちが楽しく環境学習できるように支援していきたい」と地域への応援を表明してくれた。

水辺の楽校の今年度のおもな活動計画は、川の生き物調査・観察会(6月1日)、多摩川カヌー体験教室(6月7~8日/9月27~28日)、大栗川水辺まつり(7月21日=予定)、多摩川源流体験サマーキャンプ(8月1~3日)、乞田川の恵み(8月31日)など。

←新横浜に設置された最新鋭のXバンドレーダー



さえずりの森でアケビの花満開

永山駅西側のさえずりの森では、4月12日に定例の保

全作業が行われ、恵泉女学園の学生2名を含む6人のボランティアが汗を流した。林内をまわりながらごみ拾いを行ったり、ほおのき沢の散策路でササ刈りを行った。同所では沢の名の由来になっている大きなほおのきの緑の葉がこぶしのように膨らんできており、花の季節も近いことを感じさせていた。



右上写真=江川さん撮影

また、アケビの花が満開だったり、ウグイスカグラ、花の咲きかかったタマノカンアオイ、シュンランなども見られたが、カタクリはあと1~2年後に開花か。中段の散策路脇のキツネノカミソリの葉も緑を濃くし、しっかりと勢いを増していた。



散策路のササ刈りを行う

次回の作業は4月30日だが、5月17日には「さ/え/ず/り/の/森」の看板の塗り替えなども行われる。

「ゆいま〜る聖ヶ丘」で発電開始式行わる

多摩循環型エネルギー協会が進める市民発電所(実施は多摩電力会社)の第2号となる「ゆいま〜る聖ヶ丘」が東京電力に送電を開始し、4月20日午後、同所で開始式が行われた。



エネ協の活動報告を行う林理事

式にはゆいま〜る聖ヶ丘の入所者や多摩エネ協の会員など60~70名が参加。多摩電力の山川陽一代表、多摩エネ協の高森郁也事務局長が挨拶したあと、同所を運営する(株)コミュニティネットの戸田達喜管理部長や玉井美子ハウス長などが歓迎の挨拶と同施設の紹介を行った。

また、女性ばかりの「ゆいま〜る歌声サークル」の会員が「花」「静かな湖畔」を歌い、最後に「ふるさと」を会場にいる全員で合唱し、エネ協側とゆいま〜る側の交流が一段と深まった。

同所の3棟の屋上に太陽光パネルが設置されたのは昨年12月、今年1月には関連する電気工事も終わっていながら、買電する東京電力側の都合で約3



上の大きな箱がキャパシター

ヵ月も通電が延ばされていたことになる。

その後、建物の外壁に設置された、太陽電池で発電した直流の電気を交流に変換するキャパシターや、停電時などに屋上で発電した電気を施設側で使えるようにするスイッチとコンセント、送電状態の様子を見るモニターなども公開された。

担当者の話によると、すぐそばにある電柱に設置されたトランスも容量の大きなものに交換されたが、これらの費用はすべて売電するほうの負担になるのだとか。

→モニターと右がコンセント



次世代リーダー育成プログラム 2013 報告会



報告会のあとの記念撮影

多摩循環型エネルギー協会が企画して行われていた「次世代リーダー育成プログラム」は1年間のプロジェクトを終え、4月19日に多摩センターのベネッセコーポ・ペペリビルF park でその報告会と交流会が開かれた。

これはプログラムに参加した17人の学生による、エネルギーや環境関連の企画がどう進行し、どう結実したかや反省などを、2～3人ずつのチームごとに発表するもの。6チームが発表を予定していたが、1チームが欠席。

一番バッターの「エネっ子」は恵泉女学園大学の4年生・渡辺真由、小沼彩奈、2年生・神崎恵里花さんによる「子ども向けエネルギー環境教育」で、神崎さんが市内の東愛宕小学校で出前授業を行ったことは3月1日付の読売新聞・多摩版で紹介された。

11月から1月まで全4コマ。太陽熱によるソーラークーキングなどを行いながら、まとめは「マッピングから自分の地域のことを考えてみよう」。

彼女たちは企画を通して、①身のまわりにたくさんエネルギーがあることを知ってもらう、②机に向かって行う授業では学ぶことができないことを体感してもらう、③それぞれ興味のあることを発見してもらうためのきっかけづくりができれば、と考えた。

2番目の「こなが」は本紙第120号で紹介した多摩大学4年生の小菅慧、長間裕一くんによる「多摩ニュータウン環境組合清掃工場のごみ発電施設見学と交流会」と「多摩ニュータウン地域の現状と将来あるべき多様なエネルギーについて考える」の2本立てで、ごみ発電施設見学会の企画から実際の運営までどう推移したか、自分の思いと周囲の大人のアドバイスの受け方などを報告。

3番目はチーム「ひら」の平林雄太くん(多摩大3年生)。一人で企画から実行までを行った。エネルギーと音楽は関係がある。また、エネルギーに関心のない若者たちにも音楽を媒体にすれば訴えられるということで、音楽ライブを行うことを考えた。

挫折を味わいながらも3人のエネルギーに理解あるミュージシャンを見つけ、うち一人は会場となるお店も貸してくれた。2月22日にライブを行い、10時～11時が二人のミュージシャンのライブ、11時～12時が平林×店のオーナーのトークセッションというプログラムだった。

ライブを行ったミュージシャンは平林くんの心情を理解し、会場を盛り上げてくれた。そしてメンターと呼ばれる大人のアドバイザーが常に親身になって話を聞いてくれ、どうすればいいかを一緒になって考えてくれた。

多くの人に支えられて企画が実現したことを思い、そのパワーポイントを使った発表

ういう人たちに会えたことがこの企画を通してよかったことと考えている。さらに「今後は自分もだれかの支えになっていきたい」。



つぎは「えねふあみ」による親子向けエネルギー環境教育プログラム、「親子で一緒に考えよう! “食”と“エネルギー”のつながり」。太刀川みなみ、許田健斗(多摩大学)、石田沙耶香(恵泉女学園)さんの3人組によるもの。



発表を聞くメンターら

最初は、多摩名物のクリスマスイルミネーションの電気を再生可能エネルギーでまかなうには、などと考えていたが、ミーティングを重ねるうち「フードマイレージ」の問題に行きつき、これを親子に知ってもらうために自分たち特製のカードゲームをつくり、フードマイレージを中心に食とエネルギーの関係を親子に楽しみながら理解してもらうように設定した。

メンターが永山公民館に声をかけてくれ、公民館と共催という形になり会場の講座室が使えることになった。催行日は3月16日の午後1時30分からおよそ3時間。親子10組の募集に対して3組が集まってくれた。

最初はお互いを知る時間、食を知る時間、エネルギーを知る時間、地域を知る時間、そして最後に小さな宣言を行う時間などに分けて進行。反省はカードゲームがまだまだ未熟なできで、この発展版をつくらねばと思ったこと。一つの企画にたくさんのことを詰め込み過ぎたことも反省点だった。しかし、参加者には大人も子どもの好評で、とくに子どもにはマイレージが1マイルもない多摩市産の桜ぼろぼろんがおいしかったとの声があった。

「チームあんにゃん」は武蔵野美術大学3年生の桑田麻耶、恵泉女学園3年生の渡辺杏奈さんによる「Campus Cinema×論」で、これも本紙第121号で報じたもの。原発のごみ処理に関する映画「100,000年後の安全」の上映し、それを鑑賞した観客同士が感想のグループ討論と発表、そして環境エネルギー政策研究所の古屋将太研究員とエネ協の山川勇一郎理事によるトークセッション。

これも50人の定員に対し、60人ほどが参加していたのだから、イベントとしては成功といえるだろう。

最後になったのは「しゃべり場」で、成城大学2年生の河野晃大、首都大学2年生の土屋淳悟、芝浦工大4年生の羽鳥秀介くんの3人組。炭焼き小屋で炭を焼きながら、その小屋で実際に作業している地元の古老たちとエネルギー問題についての話をかわすのがテーマだった。

メンターに紹介してもらい、八王子の山間部の小屋とのコンタクトがとれた。しかし、当日の2月8日は大雪に見舞われ、小屋にたどり着くことができず、6チームでは唯一、企画が実行できずに終わった。こういった悲喜こもごもの次世代リーダー育成プログラムだったが、本人たちにとってはかなり自信がついたようだ。

盟友・勝部隆さん逝く

当市民環境会議の草創期に積極的に事業をリードした勝部隆さんが4月18日に亡くなられた。享年73歳。多摩市内の団地の法面の調査や、本紙の前身にあたる機関紙の創刊、たまリバーコミュニティの創設など、数え上げればきりがなく多くの業績があった。謹んで冥福をお祈りしたい。

